

Winesburg, Ohio 試論

小園 敏幸

I

Sherwood Anderson (1876—1941) は1919年3月に *Winesburg, Ohio* を刊行した。この作品は25編の短編から成っており、そのいくつかは periodical publication として世に出ている。⁽¹⁾ そのうちの初期の作品については Elyria で、後期のものについては Chicago で書かれたが、*Winesburg* という町のモデルとなったのは Clyde である。“*Winesburg*” は Ohio 州内の架空の町であるというのが定説になっているが、残念ながら現実には存在する町である。Anderson 自身、*Winesburg, Ohio* が刊行されて、3ヶ月後にその事実を知ったようである。即ち、1919年6月14日付の Ben Huebsch に宛てた Anderson の手紙がそれを立証している。

Here is an interesting development. There is a Wineburg [sin], Ohio. I'll stay out of that town.⁽²⁾

因に Ohio 州の *Winesburg* という町は Clyde から75マイル、Elyria から50マイル離れたところに存在している。

Anderson は *Winesburg, Ohio* を刊行するにあたり、Edgar Lee Masters の *The Spoon River Anthology* (1915) を非常に気にしていた様である。この両作品は共に中西部の小さな町を舞台にし、そこでの人々の生活を描写しており、両者が比較されるのは当然である。

Sherwoon Anderson has written a series intensive studies on the archetypes of the small Ohio town of which he is a native. He calls it "Winesburg." The story in this issue ["The untold Lie"] is the second of a series to appear in the *Seven Arts*; and others will follow. When the whole is gathered into a volume, America will see that a prose complement to E.L. Masters' "The Spoon River Anthology" has been created.⁽³⁾

更に、Burton Rascoe は6月7日付の *Chicago Tribune* に "Winesburg, Ohio" と題して Edgar Lee Masters の *The Spoon River Anthology* と *Winesburg, Ohio* を対比させて、Anderson に賛辞を送っている。即ち Anderson は *Winesburg, Ohio* の登場人物をこよなく愛し、人間性をわかちあっている。Anderson は Chekhov や Dostoevski よりもアメリカ人にとってはもっと重要な作家である。*Winesburg, Ohio* は中西部に住む人々の性生活についても示唆的である。⁽⁴⁾

Winesburg, Ohio の刊行は、当時の文壇のみならず世間に大きな波紋を投げた。⁽⁵⁾

Anderson の文学上の父といわれている Floyd Dell——彼は妻 Margery Currey を通じて Anderson を知ったのだが——は *Winesburg, Ohio* に関して次の様に忠告している。

They [the Winesburg stories] had no form. They were not stories. A story, he said, must be sharply definite. There must be a beginning and an end.⁽⁶⁾

しかしながら Anderson は plot-story を嫌い、それを "The Poison Plot"⁽⁷⁾ と呼び、それに対して Chekhov や Turgenev の影響⁽⁸⁾ から plot-less story を主張して、人物を内面描写することにより、作品を象徴的に、しかも神秘的にしている。つまり、*Winesburg, Ohio* はアメリカの短編小説作家達に従来の plot-story にとって変る新しい形式を示したものであ

る。⁽⁹⁾

Winesburg, Ohio は、はたして、*A series of short stories* であるのか、それとも *a novel* であるのか、批評家達によって、今尚議論されている。しかし、Anderson 自身はこの作品を *a novel* と表現したことはなく、*a volume of short stories* と断言している。⁽¹⁰⁾ つまり、換言すると、*Winesburg, Ohio* の25編の作品は夫々短編としての要素を十分に含んでいるということである。

しかし、*Winesburg, Ohio* を *a novel* と考えることも出来る。⁽¹¹⁾ つまり、25編中の最初に掲載されている短編“*The Book of the Grotesque*”は導入部的意味合いをもっており、残りの24編を総称して *The Novel of the Grotesque* と考えるのである。24編に共通した素材は、人間を規格化する機械文明の社会に即応出来ずに、孤独と欲求不満に喘ぎながら、それでも尚、人間性の回復を求めて精一杯に生きようとしている素朴な人々に向けられている。所謂、Anderson の言う *grotesque* な人々に向けられている。読者は全編を読むことによって、Ohio 州の *Winesburg* というアメリカの中西部の小さな町や、そこに住む人々の生活が浮きぼりになるのである。夫々の短編は *George Willard* が媒介となって様々な *grotesques* を夫々の短編の *protagonist* として登場させている。所謂、*George* は各短編の *protagonist* の *confidant* である。従って、*Winesburg, Ohio* は様々な *grotesques* の物語である、と同時に、*grotesques* とのかかわりあいによって、*grotesqueness* を超克しようとする *George* という *protagonist* をもつ *a novel* である、ということも可能である。

II

Winesburg, Ohio の *episode* 全体を集約する、いわば序章の役割を果たしている“*The Book of the Grotesque*”の中で、Anderson は *grotesque* について語っている。要約すると次の通りである。

「人間は成長するにつれて、多くの漠然とした思想の集成物としての真

理を見つけ出して行く。そして自分に相応しい真理を見出し、それに執着して人生を過そうとした途端に、その人は grotesque になってしまう。」

19世紀後半の農本主義から機械工業による資本主義への移行という激動の時代にあっては、自己の過去の経験から自分に相応しい truth を見出し、それに執着している人間にとって、肉体と精神とは余儀なく乖離をすることとなった。即ち、肉体は the life in fact を強いられ、精神は the world of fantasy に閉じ籠らざるを得ない。やがて、そこに frustration と conflict が生じる。

“frustration” の概念はフロイトが不満に終る性的興奮をさして呼んだのに始まるが、次のように定義づけられている。

FRUSTRATION denotes the prevention of, or interference with, the satisfaction of instinctual impulses which lead to the damming up of libido and destrudo. External frustration, caused by external objects, should be differentiated from frustration imposed from within. Both may lead to the improvement of reality testing through increased tolerance of the dammed-up energy. Identification with the frustrating external object may lead to internal frustration by the ego and superego.⁽¹²⁾

また、“conflict” とは「抗争」とか「相剋」などにも訳されており、次のように定義づけられている。

CONFLICT is considered external if it takes place between one individual and another or between an individual and the external world; it is called internal when it occurs between various conscious or unconscious tendencies within the individual. Conscious internal conflict takes place between the total personality of the individual and a symptom from which he is suffering; unconscious internal conflict takes place between the id, ego and superego, and leads to an unconscious compromise (neurotic symptom).⁽¹³⁾

即ち、一般的には external と internal の場合が考えられるが、この場合には internal の方であり、intrapsychic conflict (精神内界の葛藤) を意味している。

grotesque になる主要原因は conventionalism や自己の精神内界の歪みであると考えられるが、frustration と conflict が生じ、その結果 the world of fantasy に escape すると、grotesque になるのである。escape には seclusion や escape into reality や escape into fantasy や escape into disease 等があるが、勿論無意識的に行われるのである。

物質文明や出世主義こそ人間を規格化し、非人間的な人間をつくるのだ、と Anderson は考えるのである。産業資本主義社会機構の下で、何の懸念もなく時流に乗って人生を送ることの出来る人間は、grotesque になる資格すら持ち合わせない恥ずべき生きものだと思えるのである。この様な社会機構の下で時流について行けずに外的現実と内的自我とが乖離し、むしろ fantasy の世界に閉じ籠らざるを得ないイノセンスを持ち合わせた grotesque な人間こそ正常であり、愛と理解に基づく繊細な優しさによって意思疎通が出来ると思える Anderson は考えるのである。この様な社会機構からはみ出した grotesque な人間こそ *Winesburg, Ohio* の “Paper Pills” に出てくる twisted apples⁽¹⁴⁾ であると思える Anderson は考えているのであろう。彼によると、歪になったリンゴの甘さを知っている人は僅かであるが、実はそうしたリンゴの横側の少し丸味をおびた部分には甘味のすべてが結集している。grotesque な人間には歪になったリンゴと同様に計り知れない暖かさがあり人間味がある。歪になったリンゴの甘さを発見した人がもう二度と都会人の食べる見かけの立派なまるまるとしたリンゴに心を向けないのと同様に、grotesque な人間を知ってしまった人は人間性を失わずに人間として創意工夫によって生きることの素晴らしさを、そして何よりもまして彼らの豊かな人間味を忘れることは出来ないのである。

III

Winesburg, Ohio を a novel と捉えてその protagonist である George とその母親である Elizabeth Willard を中心に精神分析的に考察する。

Elizabeth の幼年時代から結婚までの生活史は次の様に描写されている。

Elizabeth Willard could not remember her mother who had died when she was but five years old. Her girlhood had been lived in the most haphazard manner imaginable. Her father was a man who had wanted to be let alone and the affairs of the hotel would not let him alone. He also had lived and died a sick man. Every day he arose with a cheerful face, but by ten o'clock in the morning all the joy had gone out of his heart. When a guest complained of the fare in the hotel dining room or one of the girls who made up the beds got married and went away, he stamped on the floor and swore. At night when he went to bed he thought of his daughter growing up among the stream of people that drifted in and out of the hotel and was overcome with sadness. As the girl grew older and began to walk out in the evening with men he wanted to talk to her, but when he tried was not successful. He always forgot what he wanted to say and spent the time complaining of his own affairs.

In her girlhood and young womanhood Elizabeth had tried to be a real adventurer in life. At eighteen life had so gripped her that she was no longer a virgin but, although she had a half dozen lovers before she married Tom Willard, she had never entered upon an adventure prompted by desire alone. Like all the women in the world, she wanted a real lover. Always there was something she sought blindly, passionately, some hidden wonder in life. The tall beautiful girl with the swinging stride who had walked under the trees with men was forever putting out her hand into the darkness and trying to get hold of some other hand. In all the babble of words

that fell from the lips of the men with whom she adventured she was trying to find what would be for her the true word.

Elizabeth had married Tom Willard, a clerk in her father's hotel, because he was at hand and wanted to marry at the time when the determination to marry came to her.⁽¹⁵⁾

幼い頃に母親を亡くし、父親もホテルの仕事が多忙のために、Elizabeth はあまり世話をされずに、所謂かまわれぬ子として育ったのであろう。そのために、Elizabeth の性格としては、自己顕示欲求、ヒステリー性の運動暴発、虚栄、媚態、気に入られたいという欲求等が考えられるが、その反面、逆に、羞恥、隠遁への願望、非現実的な空想界を求める欲求、悲嘆、臆病、不安等も表裏一体となって存在しているのである。

Elizabeth はかわいそうな境遇に育ったために、「人生の真の冒険者」(a real adventurer in life)⁽¹⁶⁾ になって真の愛情に基づいた結婚を望んでいたのである。しかし、現実には彼女と Tom Willard の結婚には最初から愛情はなかったのである。

Perhaps I knew too much before and then perhaps I found out too much during my first night with him.⁽¹⁷⁾

そのために、Elizabeth は結婚生活に危惧を感じ、将来の夢を失ったのである。

Elizabeth は精神的には、既に夫から離れており、彼女の心の中では孤独の波が渦を巻いているのである。

Elizabeth は30代の後半から、即ち、息子 George が12歳か14歳の頃から、時々 Doctor Reefy の診察室を訪れるようになった。彼女は背が高かったが、その頃はすでに背も曲がりかけており、気怠そうに足を引きずっていた。

Elizabeth が Doctor Reefy の診察室を訪れるのは、表面的には健康上の相談であったが、本質的には彼女の生涯のことや、彼らが Winesburg で

生活してきた間に頭に浮んだ様々な考えを語り合うためであった。
そして、いつも次の様に振舞っていた。

For the most part of the words came from the woman and she said them without looking at the man.⁽¹⁸⁾

Elizabeth が Doctor Reefy に自分の私生活を話しているという事実を考慮すると、そこには患者が医師に対して抱く信頼感をはるかに逸脱していることに気付く。だが、結果的には、診察室での Doctor Reefy と Elizabeth の関係は、丁度、自由連想法 (Free Association) による分析治療中の分析医と患者の関係に似ているようである。

Elizabeth はおよそ健康とはかけ離れた話題で Doctor Reefy とおしゃべりをしているにもかかわらず、彼女の気持ちりが清新になり、毎日の単調さに耐え得る活力がついているのである。彼女は気楽に話すことにより、日常的な意識的抑制 (Suppression) が緩和されて、それがやがて無意識的抑圧 (Repression) を弱めているのである。即ち、フロイドの自由連想法による一種の Catharsis である。

彼女は Doctor Reefy の診察室を訪れるようになって、あたかも「歪になったリンゴ」のような彼の素晴らしさを知り、優しさと理解の上にきずかれた真の愛を彼に求めているのである。

一方、Doctor Reefy は職業柄様々な人達に接するが、彼の真の真価を認めてくれる様な人には巡り会えず、まだ結婚をしていないのである。そのために、彼もまた言葉では表現出来ない様な孤独の波にのまれてしまっているのである。彼は Elizabeth に出会って、結婚生活に失望した彼女の生涯のことを聞いているうちに、やはり「歪になったリンゴ」に匹敵した彼女の真価を知り、孤独からの解放を求めて、同時に、優しさと理解の上にきずかれた真の愛を彼女に求めているのである。即ち、「Elizabeth と Reefy 医師の内部にある同じもの」とは「孤独」であり、彼らが「同じ種類の解放を求めている」のは、とりもなおさず、まさにその「孤独」から

の解放である。そして、同時に、彼らは優しさと理解の上にきずかれた真の愛を求め合っているのである。

結婚して数ヵ月後のある午後、Elizabeth がひとりでドライブに出かけなければならなかった原因は一体何であろうか。

彼女は Tom Willard との結婚生活に失望していたのであるが、そうした感情を殺して長い人生を送らなければならないのだ、という気持ちが最高潮に達し、その感情のはけ口がそうした無鉄砲なドライブ事件になったのであろう。その当時の Elizabeth には「歪になったリンゴ」に相当する人物がいなかったために、彼女の欲求不満をスピードによって一時的に逃れようとしたのである。

『私はあらゆるものから逃げ出したかったのですが、同時に、また何かに向かって走りたくもあったのです』 (“I wanted to run away from everything but I wanted to run towards something too.”)⁽¹⁹⁾ と Elizabeth は言っているが、「何かに向かって走りたくもあった」とは、とりもなおさず、彼女が無意識的に Reefy 医師に求めているところの優しさと理解の上にきずかれた真の愛に向かって走りたくもあったのだ、と解釈されることが出来るであろう。

Reefy 医師は Elizabeth のドライブ事件を聞いているうちに、彼女が41歳のやつれた女ではなくて、愛らしい無邪気な少女の様な気がして、彼女を抱きしめて熱情的に接吻したのである。これは、Reefy 医師が Elizabeth を既に愛し始めた証拠であり、彼女の求めている優しさと理解の上にきずかれた真の愛が彼に受け入れられたことを物語っている。だが、次の瞬間、診察室の階段をドンドンと上ってくる重い足音が聞こえて彼らの求愛に突然終りをつげさせてしまった。即ち、二人がかたく抱き合っている行為は互いにエス (Id) の支配によるものであるが、足音によって、彼らは我に帰り、エスの支配から超自我 (Super-ego) のそれに転換し、その行為は中断されたのである。

その後、Elizabeth は二度と Reefy 医師の診察室を訪れなかった。これは、おそらく彼女の超自我がそうすることを許さなかったからであろう。

彼女は夫の Tom Willard を愛してはいないが、夫との間には既に George という息子がいるために、彼女の Reefy 医師との愛は許されるべきではないのだ、ということを超自我が自我 (Ego) に悟らせたのであろう。

Elizabeth と Reefy 医師との恋愛事件は既述の彼女の性格である自己顕示欲求に起因しているのであるが、超自我の自我への懲罰は重く、良心の呵責により、倫理的 (道徳的) 検察から、彼女の性格は陰陽全く逆の隠遁への願望へ移行せざるをえないのである。そのために、彼女は生涯の最後の数ヶ月を死に憧れ、死への道を求めているのである。死の姿をあたかも人間のように想い描き、時には丘を駆け上って行く青年のように、また時には敵格でもの静かな男の様に想像し、『愛する人よ、待っていてね。若くそして美しいままで、待っていてね』 (“Be patient, lover. Keep yourself young and beautiful and be patient.”)⁽²⁰⁾ と彼女はささやくのであった。ここには、自己顕示欲に挫折した場合に生ずる、保全衝動としての、典型的な「非現実的な空想界を求める欲求」がある。

ついに、Elizabeth の死期が訪れた時に、彼女は、結婚の時に父から受け取った800ドルのことを、息子の George に言い残すために、せめてもう一時間の生命を、と死に哀願した。あれ程憧れ求めていた愛人の腕を、必死にはねのけようとしている彼女の姿には、偉大なる母性愛をみる事が出来る。

Elizabeth が息を引きとった時に、息子の George は18歳になったばかりで、まだ彼女の死があまり理解出来なかった (Elizabeth died one day in March in the year when her son George became eighteen, and the young man had but little sense of the meaning of her death.)⁽²¹⁾ が、「胃のあたりが奇妙に空っぽになったような感じがした」(He had a queer empty feeling in the region of his stomach.)⁽²²⁾ とは、一体何を意味しているのだろうか。この点を考察するために、George の生活史をみてみよう。

George の幼児期については *Winesburg, Ohio* の中には語られていないが、“Mother” と “Death” の二編から容易に推測され得る。

既述のように、Elizabeth と Tom Willard との結婚には最初から愛情

はなかったのである。彼女は結婚を甘い夢の様に描き、衝動的に勝ち得た、Tom Willard との結婚生活であったが、恰も砂丘に建てられた城の如く無残にもくずれ落ちてしまった。

Tom Willard は家庭を顧みず、政治に情熱を傾けたのである。一方、Elizabeth は実父から受け継いだ利益のあがらない古ぼけたホテルを経営している。

やがて、George が生まれ、父親の Tom は将来 George には自分のような生き方をしてもらいたいものだと期待をかけている。他方 Elizabeth は自分の悔を残した人生を George にだけは二の舞をさせたくないと思ひ、特に夫のような機械文明の波に乗った出世主義の人間にはさせたくない、と考えていたのである。彼女にとって、George は掛替えのない宝物であり、彼女は本来ならば夫に向けるべき愛情を George に与えたのである。母親は、George が父親を憎む心を助長し、彼を母親だけの息子として彼女だけに愛を向けさせたのであろう。

正常な幼児の発達過程では、息子は母親に愛されんがためには父親のような人間にならねばならぬと考えて、父親に対する敵意を抑圧 (Repression) し、父親と自分とを同一化 (Identification) することにより、Oedipus complex は自然に解消される。

ところが、George の場合には父母の不和のために、彼は母親だけの愛を享受し、母親だけを愛することに満足しているのである。彼は自分を母親と同一化することにより愛を維持してきたのであろう。彼は母親への依存性が強く、彼の自我像 (Ich-Bild) は母親との二者一体実存を望んでいるのである。故に、George は成長して新聞記者になったが、「内気な少女のような振舞いをしたり」(acting like a gawky girl)⁽²³⁾ 母親と同様に彼もあまり外出しないのである。George の Libido は、所謂 Oedipus complex の段階に定着していると考えられる。

従って、George は女性に接しても、母親の目を通して女性を見ているのである。母親は George にとって絶対的な存在であり、彼は女性に対して、単に肉体のみを求めるのである。即ち、一種の sexual perversion である。

Louise Trunnion と初めて性経験をした George の意識は、露見さえしなければ何の罪にもならないという俗人のレベルの道德意識しかない。Kate Swift に対しても、George は一方的に性発現を試みるのである。しかし、Kate をしてはじめて 'I have missed something Kate Swift was trying to tell me.'⁽²⁴⁾ と、人間の内面の複雑さを悟りはじめるのである。

やがてやってくる愛する母親の死は、George にとって耐えがたいものであり、出来ればそれを否定したかったのであろう。

He became convinced that not his mother but someone else lay in the bed before him.⁽²⁵⁾

"That's not my mother. That's not my mother in there," he whispered to himself and again his body shook with fright and uncertainty.⁽²⁶⁾

しかしながら、George は母親の死を現実として認めないわけにはいかず、現世での母親との絆が絶たれてしまったことを悟り、「胃のあたりが奇妙に空っぽになったような感じがした」のである。

即ち、ここには、消極的ではあるが、George の Oedipus complex の脱却の兆がうかがえる。

母親の死は、George にとって、この上なく悲しいことであつたであろうが、彼はこれを機会に Winesburg を離れて都会へ行き独立しようと決心するのである。

Winesburg の grotesque な人々とも、又 Helen White とも別れて Winesburg を去って行く George は既に、かつての俗人の意識は見当たらず、grotesqueness を超克したすがすがしい男性の姿を見ることが出来る。

George の前途には、明るい未来が広がっている様に思われる。

George の Winesburg からの旅立ちは Anderson の作家への転身を意味している。

(論理の展開上、過去の拙論と重複した箇所があることを付記する。)

Notes

- (1) *Winesburg, Ohio* の中の次に示す短編は periodical publication として、当時の雑誌に掲載された。
- “The Book of the Grotesque,” *Masses*, Feb. 1916.
- “Hands,” *Masses*, March 1916.
- “The Strength of God,” *Masses*, Aug. 1916.
- “Queer,” *Seven Arts*, Dec. 1916.
- “The Untold Lie,” *Seven Arts*, Jan. 1917.
- “Mother,” *Seven Arts*, March 1917.
- “The Philosopher,” *Little Review*, March 1917.
- “The Thinker,” *Seven Arts*, Sept. 1917.
- “An Awakening” *Little Review*, Dec. 1918.
- (2) Letters, Newberry Library, 1919.
- (3) Anon. “Notes on Names.” *Seven Arts*, 1 (January), inside front cover.
- (4) Burtón Rascoe, “Winesburg, Ohio” *Chicago Tribune* (7 June), p. 13. を参照
- (5) *Sherwood Anderson’s Memories: A Critical Edition*
(The University of North Carolina Press, 1969):

Later, when I had become a writer and had written and published books, I wrote and published a book of tales, called *Winesburg, Ohio*, and when it was published there was an outbreak of bitter denunciation. Letters kept coming to me, many letters, and they were all from women. “You are unclean. You are one who has a filthy mind,” they said and, for a time, there was so much of it that I began to distrust myself. I went about with head hanging in shame. (p. 177.)

And these other letters kept coming, for the most part from women. What names I was called. They spat upon me, shouted at me, used the most filthy of words and I remember one letter, in particular, from the wife of a man who had been my friend. She said she had once been seated beside me at a dinner table. “I do not believe that, having been that close to you, I shall ever again feel clean,” she wrote. And so it went on. How strange to think of it now, when the same book is being used as a text book in colleges, a book that was burned on the public square of one New England town, that such critics as Floyd Dell and Henry Mencken had condemned, not publicly and not, with these men, on moral grounds, but, as they said, because the stories were not stories. I think that later, a good many years

later, both men made claims to having been, more or less, the fathers of the stories. I think that by the time they came to make the claim they had both convinced themselves it was true. I think that it is now generally recognized that the little book did something of importance. It broke the O. Henry grip, de Maupassant grip. It brought the short story in America into a new relation with life. I myself think that the real fathers and if you please the mothers of the *Winesburg* stories were the people who once lived with me in a Chicago rooming house, the unsuccessful Little Children of the Arts. (pp. 349—350.)

Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* [Edited by Paul Rosenfeld.] (New York: Harcourt, Brace and World, Inc., 1942), p. 294.

Still the reception of *Winesburg* amazed and confounded me. The book was widely condemned, called nasty and dirty by most of its critics.

- (6) Sherwood Anderson, *Letters of Sherwood Anderson*, (edited by Howard Mumford Jones and Walter Rideout. Boston, Mass.: Little Brown, 1953), p. 405.
- (7) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969), p. 352.
- (8) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson Memoirs: A Critical Edition* (The University of North Carolina Press, 1969), p. 451.

... I began to read the Russians, Tolstoy, Chekhov, Dostoevsky, Turgenyev. I think that then, when I came to them, that I did feel a kinship. Is it egotistical of me to say so? I felt a brotherhood with Chekhov and, in particular, with Turgenyev in his *Annals of a Sportman*. I remember that Paul Rosenfeld soon called me "The Phallic Chekhov."

- (9) Maxwell Anderson, "A country Town" *New Republic*, 19 (25 June), 1919. p. 260.
- (10) *Sherwood Anderson's Memoirs: A Critical Edition* の中では *Winesburg, Ohio* を一貫して a series of short stories と呼んでいる。
So I invented a figure I called George Willard and about his figure I built a series of stories and sketches called *Winesburg, Ohio*. (p. 22.)

Later, when I had become a writer and had written and published books, I wrote and published a book of tales, called *Winesburg, Ohio*. (p. 177.)

He [Jacques Copeau] was, at that time, particularly interested in a book

of tales I had written and that I had called *Winesburg, Ohio*. He said the tales had excited him. (p. 362.)

I had myself written, in my *Winesburg* tales, the story of a woman who seemed to me a rather fine mother. (p. 409)

When he [Hemingway] began to write he began with the short story and I had already published my *Winesburg, Ohio*.

I had published also my *Horsed and Men* and my *Triumph of the Egg*. (p. 462.)

At the time I was being published by Ben Huebsch who had taken my *Winesburg* stories after they had been kicked about in several publishing houses. (p. 490.)

- (11) 短編 25 編が 1 冊にまとめられて、出版されて好評であったことが、*Sherwood Anderson's Memoirs* (Edited by Paul Rosenfeld, New York: Harcourt, Brace and World, Inc., 1942), p. 289. に次の様に言及されている。

The stories belonged together. I felt that, taken together, they made something like a novel, a complete story.... I have even sometimes thought that the novel form does not fit an American writer, that it is a form which had been brought in. What is wanted is a new looseness; and in *Winesburg* I had made my own form. There were individual tales but all about lives in some way connected. By this method I did succeed, I think, in giving the feeling of the life of a boy growing into young manhood in a town. Life is a loose, flowing thing.

- (12) Ludwing Eidelberg (Editor-in-Chief), *Encyclopedia of Psychoanalysis*, Collier-Macmillan Limited, London, 1968, p. 167.

尚、Glover と Freud は各々、次のように述べている。

Glover (1939) noted: "But to grasp the more human aspects of symptomatic regression it is necessary to be familiar with the small child's ideological systems. As has been pointed out the infant has from the first a reality system appropriate to the conditions of life in which it finds itself, but as development proceeds, and as thought-processes become organized, a distinction can be drawn between ideas that focus round reality experiences of pleasure and pain and phantasies that are developed as a response to complete frustration of instinct. These systems of unconscious phantasy have no doubt a compensatory function to perform

although the gratification obtained by this means is at best marginal. Even so it is heavily discounted by the anxieties and, later, guilts to which unconscious phantasies give rise. Phantasy formation is fostered by periodic regressions from waking to sleeping life and by numerous misreadings of waking experience to which the small child is naturally prone. So that whilst there is an *appropriate system of reality thinking for each phase of development*, these systems are increasingly infiltrated or at any rate unconsciously associated with *phantasy systems that are also appropriate to the stage of instinctual frustration at which the child has arrived.*"

Freud (1916—1917) stressed the important role of frustration in symptom formation and noted: "The necessary precondition of the conflict is that these other paths and objects arouse displeasure in one part of the personality, so that a veto is imposed which makes the new method of satisfaction impossible as it stands."

REFERENCES

Sigmund Freud, 1916—1917, "Introductory Lectures on Psycho-Analysis." *The Standard Edition of the Complete Works of Sigmund Freud*, J. Strachey (ed.) The Hogarth Press and The Institute of Psychoanalysis, 16: 349—350, 1953.

Edward Glover, *Psycho-Analysis*, Staples Press, London, England, p. 31, 1939.

(13) *Ibid.*, p. 79.

(14) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: The Viking Press, 1966), p. 36.

In the fall one walks in the orchards and the ground is hard with frost underfoot. The apples have been taken from the trees by the pickers. They have been put in barrels and shipped to the cities where they will be eaten in apartments that are filled with books, magazines, furniture, and people. On the trees are only a few gnarled apples that the pickers have rejected. They look like the knuckles of Doctor Reefy's hands. One nibbles at them and they are delicious. Into a little round place at the side of the apple has been gathered all of its sweetness. One runs from tree to tree over the frosted ground picking the gnarled, twisted apples and filling his pockets with them. Only the few know the sweetness of the twisted apples.

(15) *Ibid.*, pp. 223—224.

(16) *Ibid.*, p. 224.

-
- (17) *Ibid.*, p. 226.
 - (18) *Ibid.*, p. 222.
 - (19) *Ibid.*, p. 227.
 - (20) *Ibid.*, p. 228.
 - (21) *Ibid.*, p. 229.
 - (22) *Loc. cit.*
 - (23) *Ibid.*, p. 44.
 - (24) *Ibid.*, p. 166.
 - (25) *Ibid.*, p. 231.
 - (26) *Loc. cit.*